
原因と意味

炯々とおる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

原因と意味

【Nコード】

N6802Z

【作者名】

炯々とおる

【あらすじ】

炯々とおるのおはなし

天の川の銀河の端、ある小さな惑星に宇宙船が不時着した。燃料切れによる原因の不時着であったので、特に何処かが破壊される事や、燃える事もなく、無事に着地することが出来た。

「まいったな…。この惑星はどうやら地球と似ているようだけど、何か食える物はあるのかな？」乗組員のムウは、周りを見渡ししながら宇宙船から降りる。

ムウが不時着した惑星は、まるで火星の様に地面は赤茶色をしていたが、大気は地球とほとんど変わらず、空気も調べてみたところ、地球の物とほとんど変わっていなかった。ただ、ムウが一見したところ、水や草木などは一切見当たらなかった。一面、赤茶色の地面が何処までも続いていた。もちろん、何か生物が居ると思えなかった。

「うーん。どうやら食べられそうな物は無さそうだな…。取り敢えず、食料は宇宙船に残っている物で何とかするとして、救難信号は出しておこう。ここは銀河の端とはいえ、そこそこ宇宙船が通るところに面しているし…。あ、そうだ」ムウは何かを思いついたのか、宇宙船の中からバイクと、たまたま持っていた石灰が入った巨大な袋を運び出してきた。ムウが持っていたバイクは、ただのバイクでは無く、ありとあらゆる重力に対応して、超高温、超低温にも対応できる特別なバイクを、ムウは偶然持っていたのだ。「救難信号だけじゃ無く、せっかくこのバイクが使えるそうなんだから、大気圏外からでも見えるほどの大きさの文字を、地表に書いて助けを求めてみるか。なんて書いたら良いかな…？ 取り敢えず、『SOS』って大きく地表に書くか」そう決めると、ムウは救難信号を出した後、バイクに石灰の袋を詰め込み、バイクにまたがり、巨大な文字を地面に書きに行った。

文字自体は、そこまで制作するのに時間は掛からなかった。大気

と空気は地球と似ていたが、重力自体は地球の半分ほどであったので、石灰の袋を運んだりする時に、重さで苦勞する事も無く、またラインを引く時にも、バイクの機能の一つに石灰でラインを引く機能があったので、大氣圏外から見える文字を制作するのに、半日と掛からなかった。

ムウは出来上がった巨大な『SOS』と言う文字を見て、満足する。「よし、これぐらいの大きさの文字だったら、大氣圏外からでも確認出来そうだな…。あとは誰かが見つけてくるのを待つだけだな」ムウはそれで満足して、取り敢えず体力温存のために、宇宙船の中で休むか、と思った。

数日後、ムウが救命船の到着を今か今かと待ち続けていると、ふと空から何かが来るのを、目視で確認することが出来た。

「あれは…？ もしかして、救命船か！？」ムウは期待して外に出て、それが救命船で、無事に着陸してくれる事を期待する。

だんだんと近付いてくると、その来るものが、黒い宇宙船である事がはっきりと分かった。ムウは救命船だと思い、空に向かって、おーい、おーい、と手を振る。だがその黒い宇宙船は何故か速度を緩めず、そのまま地表にへと向かって来る。「ありゃ…？ 何だかあれは落下している様な感じだぞ…？」ムウの予想通り、黒い宇宙船はそのまま速度を緩める事を無く、そのまま地面に激突し、炎上した。爆音が数百メートル離れたムウの耳にも突き刺さった。

「うわあ！」と思わずムウは声を出す。「と、取り敢えず、助けに行こう」宇宙船にしまったバイクを取り出してまたがり、墜落した黒い宇宙船の乗組員を助けに向かう。

ムウが黒い宇宙船の墜落現場に到着するが、既に火はどうしようもないほど大きくなって、宇宙船全体を包んでいた。小さな消火器程度しか持っていなかったムウにはどうしようもなかった。仕方なく、火が自然と燃え尽きるまで待つ事にせざるを得なかった。幸い、草木などは生えていなかったので、地面に燃え移る心配は無かった。

数時間後、黒い宇宙船を覆っていた火が消えたので、ムウは慎重に乗組員を搜索したが、既に宇宙船は瓦礫の山と化していて、乗組員の遺体どころか、何が何だか分からない黒い物が転がっている、という事ぐらいにしかムウには分からなかった。遺体があるかどうか、宇宙船は何が原因で落ちたのか、ムウには結局一つも分からなかった。

次の日、ムウがまた、救命船が来ないかなあ、と空を見上げてみると、また昨日と同じく、宇宙船がやって来るのが目視出来た。来たか！？　　と思ひ、ムウはまた手を振るのだが、その宇宙船は、昨日墜落した宇宙船と同じく、速度を一向に緩めようとはしない。「まさか…」ムウは思わず呟き、そしてムウの想像通りになった。またその宇宙船は、速度を緩めることが無く、そのまま地面に激突した。またもや爆発音がムウの耳に響いた。

ムウはすぐさま墜落現場に向かったが、またもや火がどうしようもないほど小さくなっている状態であり、そのまま呆然と見ているほかに無かった。火が消えた後、昨日と同じく遺体や何か墜落の原因となったものは無いか探すが、やはり何も発見する事は出来なかった。赤茶色の地面に、黒い二つの瓦礫が残された。

その後も、毎日同じことが続いた。一日に一隻の宇宙船がムウが居る惑星に墜落して、炎上する。ムウは何とかしてこの不可解な事故の原因を調べようと思った。まずムウは、落ちて来る宇宙船に向かって無線で呼びかけてみたが、何も応答は無かった。ありとあらゆるチャンネルで問いかけて見たが反応が無く、旧時代の遺物となっていたモールス信号も試してみたが、それでも反応は無かった。次にムウは、自分の宇宙船に積まれていた各種検査器具を使って、何かこの惑星の気や空気中に、宇宙船に影響を与えている物が在るのではないかと考え、調べてみたが、やはり何もおかしな点は見つからなかった。何を調べても、宇宙船が墜落しそうな原因を発見

出来なかった。

ムウは、あまりにも宇宙船がこの惑星に墜落して、しかもその原因が分からないので、もしかして、この惑星は呪われているのではないか、とさえ思った。ムウは普段、呪いなんてある訳ない、そんな物は昔の空想の産物だ。と思っていたが、こうも理解不能の現象があれ続くと、その様な方向に考えてしまうのであった。

それからは、ムウはただじっと宇宙船の中で、救命船が来るのを待ち続けた。外で爆発音が聞こえても、もう確認する事もなくなつた。ムウはただ、普通に宇宙船が着陸してくれるのを待ち続けた。

ムウが居る惑星から少し離れた宇宙空間に、ある地球外生命体、つまり宇宙人が乗っている宇宙船が航海していた。その宇宙船は、後ろに無人の宇宙船を連結していて、引っ張っていた。

「さて……。早い所、このケツにくっ付いている宇宙船を処分しねえとなあ……。廃棄処分となった宇宙船なんか、その辺の赤色巨星に突っ込ませれば良いのに、訳わからん条約で、そう言う事が出来なくなっちゃったしなあ……」宇宙人は呟きながら、何気なくコクピットから外を見る。ムウが居る惑星が見え、そしてムウが制作した巨大な『SOS』と言う文字も見えた。ムウが制作した巨大な文字だ。「おっ……。『SOS』って。こんな所に廃棄場が出来たのか。惑星を廃棄場にするなんて結構珍しいが、まあ良いか。さっさとぶち込ませて仕事を終わらせよう。あ、そうだ。他の奴らにも一応、教えておくか。惑星に廃棄場、なんてのは珍しいしな。もしかしたら、もう結構知られてんのかもな」宇宙人はそう呟いた後、宇宙船にくっ付いている廃棄処分の予定の宇宙船を、非常にめんどくさかったので、残っていた燃料を抜く事無く、自動制御装置を作動させ、そのままムウが居る惑星に向かって突っ込ませた。

「誰がここに廃棄場作ったのか知らねえけど、感謝しないとな」宇宙人はそう思ったのち、また廃棄処分の宇宙船を持ってこようと、

自分が乗っている宇宙船を、超光速で飛ばして、そのまま何処かへと消えて行った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6802z/>

原因と意味

2011年12月22日21時50分発行